

B-4

日本語の命令文における主題化空主語の認可について

野口 雄矢 (大阪大学大学院)

u718598d@ecs.osaka-u.ac.jp

1 はじめに

○用語の導入

- ・命令文における主題化空主語 (Topicalized Null Subject in Imperatives; TNS-I)

…日本語の命令文において通常音声形式を伴わずに表される 2 人称の主語が、音声形式を伴い、
ハで標示された主題句

- (1) 君は書類を片付けろ

○本発表の目的

- ・TNS-I の認可には先行研究での分析以上のプロセスが必要である

= TNS-I と Speech Act Phrase (SAP) 主要部間での、[voc(ative)] 素性について的一致 (Agree) に
よって認可される

⇒日本語の統語構造において、SAP が存在することを支持

2 先行研究

※上田 (2007), 上田 (2011), 長谷川 (2012)

… TNS-I が「題目」解釈を得られず、「対比」解釈を得ることを統語的観点から説明¹

●TNS-I は、TopP より下の位置を占める

e.g., 上田 (2007): 「EPP 素性の充足」の観点からの説明 (註 3 も参照)

- ・assumption: 日本語の EPP 素性は、CP 領域内 (cf. Rizzi 1997) の階層において、主要部、あるいは指定部が音韻的に具現化されることによって満たされる
(cf. Alexiadou and Anagnostopoulou 1998, Ueda 2002, Hasegawa 2005)

- (2) 上田 (2007) における命令文の構造²

[U-ModP [E-ModP [TP [_{VP} 主語] T] E-Mod] [U-Mod 命令形態素 [_{2nd person}]]] (cf. 上田 2007: 275)

⇒ U-ModalP の主要部 (命令形態素) によって EPP が満たされる (※U-ModalP: CP 領域の階層)

- (3) (2) において「題目」解釈を意図した TNS-I を含んだ構造

[CompP *Topic-は [U-ModP [E-ModP [TP [_{VP} 主語]]] 命令形態素 [_{2nd person}]]] (cf. 上田 2007: 286)

⇒ U-ModalP の主要部で既に EPP が満たされているため、Topic が生起できない

(※Topic: CP 領域内の階層 (CompP) の指定部に生起)

⇒∴ TNS-I は題目解釈を可能にする CP 領域内で生起できず、元位置の _{VP} 指定部にとどまる³

¹ 本発表では、TNS-I が厳密に「題目」と「対比」のどちらの解釈を得るかということについては議論しない。この議論については統語的要因だけでなく、文脈や発話環境等の語用論的要因も関わっていると考えられる。例えば堀川 (2010) は (i) におけるハ句は、a, b, c の順に「対比」の意味合いが弱くなると述べている。

(i) a. 君は先に行け

b. お降りの方はこのボタンを押してください

c. 人類はもつと謙虚になれ (日経ビジネス 2008.10.20)

(堀川 2010: 24-25)

² E(pistemic)-ModP は「認識モーダル」が、U(tterance)-ModP は「発話伝達モーダル」が生起する階層である。

3 問題点

●TNS-I は、ReportP 内部に埋め込むことができない

○ReportP の導入

(4) 日本語の CP 領域 : Saito and Haraguchi (2012), 斎藤 (2013)

[ReportP ... [ForceP ... [*TopicP ... [FiniteP ... Finite (の)] *Topic] Force (か)] Report (と)]
(斎藤 2013: 248)

⇒**Point** : 間接引用を示すトが、疑問文や命令文などの文タイプを示す ForceP よりも上位に存在する ReportP の主要部を占める⁴

⇒Evidence : 間接引用のト節に、様々な文タイプ (i.e., ForceP) を埋め込むことが可能

(5) a. 疑問文

太郎_iは次郎_jに [[花子が彼_{ij}の家に来るか] と] 尋ねた (cf. 斎藤 2013: 222)

b. 命令文

花子_iは太郎に [[彼女_iの家にいろ] と] 命令した (cf. 斎藤 2013: 229)

※ReportP (間接引用) 内部には、終助詞や間投詞は生起できない

(cf. Saito and Haraguchi (2012), Nasu (2012))

⇒「直接引用」とは区別する

(6) a. ジョン_iはメアリーに [[(*あ!) その書類は彼_iの部下がなくした (*よ)] と] 言った

b. ジョン_iはメアリーに 「あ! その書類は {僕_iの / *彼_iの} 部下がなくしたよ」 と言った
(cf. Nasu 2012: 212)

	様々な文タイプ	主節要素を指す代名詞	終助詞	間投詞
間接引用への埋め込み	○	○	×	×
直接引用への埋め込み	○	×	○	○

図 1

○本発表での議論に関連する予測

- ReportP は命令文を埋め込むことが可能 (∵ ForceP < ReportP) ⇒ (5b)

- ReportP は題目のハ句を埋め込むことが可能 (∵ TopP < ReportP)

(7) 太郎_iは [[花子は彼_iの家にいた] と] 言った (cf. 斎藤 2013: 244)

³ 上田 (2011) は、ForceP 主要部と、ForceP 指定部へ移動した空主語が有する [主題] 素性の中で一致が起こり、その関係において、上述したような EPP 充足に関する制約により、題目解釈を伴った TNS-I の生起が阻まれ、TNS-I は結果的に FocP より下の TopP (FinP < Top2P < FocP < Top1P < ForceP) の指定部に位置すると論じている。長谷川 (2012) は、Kuroda (1976, 1992) の主題に対する考察 (i.e., Categorical Judgment) をもとに、命令文における空主語が題目解釈をもつとする上田 (2011) の見解に反論している。長谷川 (2012) は TNS-I の生起位置を明示していないが、管見では、人称制限を受ける FinP の指定部とみなしていると思われる。詳細については、元論文を参照されたい。

⁴ 斎藤 (2013) では、ReportP 主要部を占めるトは「直接引用の言い換えを示す補文標識」と呼ばれているが、本発表では説明の簡素化のため、「間接引用」と呼ぶ。また、本発表では (5) のように、ト節内に代名詞を用い、それが主節内の要素と照応できるかによって「間接引用」のト節と「直接引用」のト節を区別する。詳細は本発表の議論を参照されたい。

○TNS-I と間接引用

- ・ 先行研究からの予測

… TNS-I は、ReportP 内部に埋め込むことができる

- ∴
- TNS-I は TopP より下の位置を占める (cf. TopP < ReportP)
 - ReportP 内部には、TNS-I の生起を阻害する要因はない

⇒**Point** : TNS-I は、ReportP 内部に埋め込むことができない

(8) *部長は春子_iに [[彼女_iは早く書類を片付けろ] と] 言った

cf. 部長は春子に「君は早く書類を片付けろ」と言った

※「命令文が ReportP に埋め込まれると、ハを伴った句が一律に生起できない」わけではない

(9) 部長は春子_iに [[次の会議は彼女_iが仕切れ] と] 言った

∴TNS-I には、先行研究では分析できない側面が存在する

4 提案 : SAP 分析

- TNS-I の認可には、SAP が関与する

4.1 TNS-I の解釈 : 堀川 (2010)

- TNS-I は、「呼びかけ(Vocative)」の意味を有する

◎堀川 (2010) : 「典型的な題目語」における〈意味要件〉の再考⁵ (cf. 尾上 1995, 堀川 2005)

(「P ハ Q」における) 意味要件	提案	(典型的な) 例
①「説明内容－説明対象」 (「モノーあり様/在り方」 cf. 堀川 2005)	尾上 (1995)	・ 形容詞文 e.g., 雪は白い ・ 動詞文 : 題目＝ガ格 e.g., 太郎はドイツから帰ってきた
②「処置課題－処置内容」	堀川 (2005)	・ 命令文 : 題目＝ヲ格 e.g., 武器は捨てろ
③「呼びかけ－希求そのこと」	堀川 (2010)	・ 命令文 : 題目＝ガ格 e.g., 君は先に行け

図 2

○ 呼びかけ句と題目語の近接性⁶

(10) a. 大本君、会計係を担当してくれ

b. 大本君は会計係を担当してくれ

(cf. 堀川 2010: 24)

⁵ 尾上 (1995) は、「典型的な題目語」の要件として、概略、①「一文の中で、その成分が全体の中から仕切り出されて、表現伝達上の前提部分という立場に立つ」、②「その成分が、後続部分の説明対象になっている」という条件を挙げている。本稿では堀川 (2012) 等にならい、①を〈断裂要件〉、②を〈意味要件〉と呼ぶ。

⁶ 同趣の見解としては、Lambrecht (1996)、前原 (2000)、メイナード (2000) を参照されたい。

- ・ (10a) : 「大本君」に注意を集めたうえで、後続部分につながるという関係にある
 = 前半部分と後続部分が一旦は切れつつも、全体で一つの意味世界を構成する
 ⇒ 「典型的な題目語」における〈断裂要件〉を満たしている⁷ (cf. 尾上 1995)
 = (広い意味で)「題目－解説」関係が成り立っている
- ・ (10b) : (10a) の呼びかけ句における「断続関係」が助詞「ハ」として具現化
 (cf. 「いうまでもなく断続関係を表す助詞が「ハ」である」 (堀川 2010: 20))

4.2 統語構造における呼びかけ句 : Haegeman and Hill (2014)

- (西フレマン語における) 呼びかけ句は Speech Act Phrase (SAP) 内に生起する⁸

※Speech Act Phrase (SAP) : the layer which “encodes the interpersonal communicative function of an utterance (Nasu (2012): 206)”⁹

○西フレマン語における SAP についての assumption

- ・ SAP の主要部には、文頭・文末に生起する Particle (e.g., *da, nè, wè, zè, né, zé*) が生じる
- ・ SAP は 2 つの階層 (SA2P < SA1P) から成る (∴ 最大 2 つの Particle を取る事が可能)
- ・ SA2P は ForceP を補部を取る (∴ 文タイプに対して選択制限を示す Particle がある)
- ・ SAP 領域内で、複雑な移動が見られる (詳しくは註 10 を参照)

(11) [_{SA1P} [_{SA1} Part(icle)]] [_{SA2P} [_{SA2} Part] [_{ForceP} ... [TP]]]]¹⁰

○呼びかけ句の生起位置

- ・ 西フレマン語における呼びかけ句は SAP 内に生起する

⇒ Evidence : 呼びかけ句と Particle の間で、語順の制約が存在する

(12) a. Né Valère, men artikel is gereed wè.

nè Valère(Voc) my article is ready wè

b. *Valère nè, men artikel is gereed wè.

c. Né men artikel is gereed wè Valère.

d. *Né men artikel is gereed Valère wè.

(Haegeman and Hill 2014: 229)

⇒ SAP 領域内における複雑な移動の結果として生じる、SAP 内の呼びかけ句と Particle の間の位置関係として説明できる (詳しくは註 10 を参照)

⁷ 〈断裂要件〉については、註 5 を参照されたい。

⁸ Hill (2007) は、ルーマニア語などの他言語でも、呼びかけ句が SAP 内に生起すると主張している。

⁹ SAP についての代表的な先行研究としては、Speas and Tenny (2003) を参照されたい。

¹⁰ (11) では、説明の簡素化のため、簡略化した構造を記載している。(i) は移動を含めた、より詳細な構造である。

(i) a. [_{sa1P} [_{sa1} *né*] [_{SA1P} VOC(ATIVE) [_{SA1} *nè*] [_{sa2P} [_{sa2} *wè*] [_{SA2P} VOC [_{SA2} *wè*] [_{ForceP}]]]]]]

b. [_{sa1P} [_{sa1} *né*] [_{SA1P} VOC SA1 [_{sa2P} [_{ForceP}] [_{sa2} *wè*] [_{SA2P} VOC SA2 [_{ForceP}]]]]]]

c. [_{sa1P} [_{sa2P} [_{ForceP}] [_{sa2} *wè*] [_{SA2P} VOC SA2 [_{ForceP}]]] [_{sa1} *né*] [_{SA1P} (VOC) SA1 [_{sa2P}]]]

Haegeman and Hill (2014) では、各 SAP が shell structure を成し、sa1P、sa2P が存在すると主張している。また「a→b→c」の派生順で移動が起こり、「a→b」の移動は義務的、「b→c」の移動は随意的であると述べている。これらの移動の結果、(12) に示すように、呼びかけ句と Particle 間で語順の制約が観察される。

4.3 TNS-I の認可

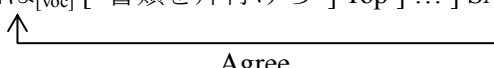
●TNS-I は、TNS-I と SAP 主要部が有する [voc] 素性間での一致 (Agree) によって認可される

○4.1, 4.2 から得られる assumption

- [- TNS-I は、「呼びかけ(Vocative)」に関する素性 [voc(ative)] を有する (cf. 堀川 2010)
 - SAP 主要部は、[voc] 素性を有する (cf. Haegeman and Hill 2014)

○TNS-I の認可 : [voc] 素性間での一致

(13) a. 君は書類を片付けろ (= (1))

b. $[_{SAP} \dots [_{TopP} \text{君は}_{[voc]} [_{\text{書類を片付けろ}}]_{Top} \dots]_{SA_{[voc]}}]^{11}$

 Agree

○問題点の解決

※第3節で示した問題点 : TNS-I は ReportP 内部に埋め込むことができない

(14) *部長は春子_iに [[彼女_iは早く書類を片付けろ] と] 言った (= (8))

・より詳細な日本語 CP 領域の提案を採用 : Noguchi (2016)

(15) [QuoteP [SAP [ReportP [ForceP [FinP (の)] (か)] (と 1)] (わ/よ/ね...)] (と 2)]¹² (Noguchi 2016)

- ⇒ [- ReportP : 間接引用標識「と 1」を主要部にとる
 - SAP : 終助詞などが生起¹³ (cf. Saito and Haraguchi 2012, Nasu 2012, Kido 2015)
 - QuoteP : 直接引用標識「と 2」を主要部にとる

⇒Evidence : 終助詞は、直接引用内には生起できるが、間接引用内には生起できない (cf. (6))

⇒∴ SAP は QuoteP よりも下位に、ReportP よりも上位に生起する

=SAP : QuoteP には含まれるが、ReportP には含まれない (註 13 も参照)

(16) a. 花子は「太郎は私の家にいるよ」と言った

b. 花子_iは [[太郎は彼女_iの家にいる (*よ)] と] 言った

⇒Point : SAP は ReportP よりも上位に生起する = ReportP は SAP を含むことができない

⇒ (14) は、TNS-I (「彼女は」) の認可に必要な SAP が ReportP 内に生起し得ないため非文となる

¹¹ TNS-I の正確な生起位置の考察については将来の議論に委ねることとする。本発表では TNS-I が TopP 指定部に位置すると想定する。

¹² 間接引用と直接引用の標識を区別するため、それぞれ「と 1」「と 2」と表記する。

¹³ Nasu (2012) は、主題句における名詞句が発音されず、主題標識である「は」だけが發音される Topic-particle Stranding という現象 (e.g., A: 携帯はどの機種が流行ってるの? B: ϕ はソニーの機種が流行ってますね。) には、また Noguchi (2016) は「さっさとする!」といった、終止形 (辞書形) の動詞を用いて命令の意味を表す辞書形命令文には SAP が関与していると主張しており、両現象とも、直接引用には埋め込み可能だが、間接引用には埋め込むことができないことを示すデータを提示している。

(i) 誰がその書類をなくしたか聞かれたとき、ジョン_iは [[ϕ は彼_{*i/j}の部下がなくした] と] 言った
 (cf. Nasu 2012: 212)

(ii) 母は [[私の部屋で勉強する!] と] 言った (「私」=*話し手 / ✓「母」)
 (cf. Noguchi 2016)

5 結語

- TNS-I は、TNS-I と Speech Act Phrase (SAP) 主要部間での、[voc(ative)] 素性 (cf. 堀川 2012, Haegeman and Hill 2014) について的一致 (Agree) によって認可される
⇒日本語の統語構造において、ForceP および ReportP より上位に SAP が存在することを支持

<主要参考文献>

- Haegeman, Liliane and Virginia Hill (2014) Vocatives and Speech Act Projections: A Case Study in West Flemish. In Anna Cardinaletti, Guglielmo Cinque and Yoshio Endo (eds.), *On Peripheries*. Tokyo: Hituzi Syobo, pp. 209-236.
- 長谷川信子 (2012) 「空主語の意味解釈と主題化」 *Scientific Approach to Language* 11: 17-46.
- 堀川智也 (2005) 「「典型的な題目語」の意味的立場」『日本語文法』5 巻 1 号: 39-54.
- 堀川智也 (2010) 「「題目語」と「呼びかけ」の解釈」『大阪大学世界言語研究センター論集』2: 19-33.
- Lambrecht, Knud (1996) On the Formal and Functional Relationship between Topics and Vocatives: Evidence from French. In Adele E. Goldberg (ed.), *Conceptual Structure. Discourse and Language*. Stanford, California: CSLI Publications, pp. 267-288.
- 前原かおる (2000) 「呼びかけの特徴－題目との近接可能性」『広島大学日本語教育学科紀要』17: 39-54.
- 泉子・K・メイナード (2000) 『情意の言語学: 「場交渉論」と日本語表現のパトス』くろしお出版, 東京.
- Nasu, Norio (2012) Topic Particle Stranding and the Structure of CP. In Lobke Aelbrecht, Liliane Haegeman and Rachel Nye (eds.), *Main Clause Phenomena: New Horizons*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 205-228.
- Noguchi, Yuya (2016) Does ForceP Determine All the Illocutionary Forces? -Case Study of Dictionary Form Imperative in Japanese-. Poster presentation at Formal Approaches to Japanese Linguistics 8 (FAJL8).
- 尾上圭介 (1995) 「「は」の意味分化の論理－題目提示と対比」『言語』24 巻 11 号: 28-37.
- 斎藤衛 (2013) 「日本語埋め込み文の意味的・談話的特質－比較統語論への招待」『生成言語研究の現在』池内正幸、郷路拓也 (編) 221-251. ひつじ書房, 東京.
- Saito, Mamoru and Tomoko Haraguchi (2012) Deriving the Cartography of the Japanese Right Periphery: The Case of Sentence-Final Discourse Particles. *IBERIA: An International Journal of Theoretical Linguistics* 4 (2): 104-123.
- Speas, Peggy and Carol Tenny (2003) Configurational Properties of Point of View Roles. In Anna Maria Di Sciullo (ed.), *Asymmetry in Grammar*. Amsterdam: John Benjamins, pp. 315-344.
- 上田由紀子 (2007) 「日本語のモダリティの統語構造と人称制限」『日本語の主文現象』長谷川信子 (編) 261-294, ひつじ書房, 東京.
- 上田由紀子 (2011) 「日本語の空主語とモダリティ」『70 年代生成文法再認識－日本語研究の地平』長谷川信子 (編) 277-294, 開拓社, 東京.